

初代監督小竹信行 創部の精神

佐田 博 (昭和 40 年卒)

はじめに

このたび OB 会よりラグビー部の草創期当時の原稿依頼があり、僭越ですが創部時代の御報告をさせていただきます。

さて一昨年の創部 70 周年を前に若手 OB より、中央高校ラグビーの歴史を知りたい声が聞こえるようになりました。遡りますが創部 50 周年記念の時に、元ラグビー部長の故岸先生から「部歌が解らなくなった」ので創部の歴史を追跡する手紙が届きます。三年前になりますが男鹿市で健在な大先輩を訪ね、草創期時代の創部の精神である「部歌」を検証した時の御報告をいたします。

ラグビー部誕生と部歌「創部の精神」

岸元部長の意向に沿い平成 27 年 2 月 25 日に S39 卒「近野」S40 卒「佐田」S41 卒「金義悦」と創設期 OB の第 1 期生「吉田氏」第 2 期生「近藤」氏、第 3 期生「小坂」氏とお会いし、市立中学（秋田市立高・秋田中央高）ラグビー部の創設者小竹信行監督の知られざる経歴を中心に草創期時代を追跡しました。

第一期生である吉田主将のラグビーへの動機は、幼少から憧れていた従弟の存在がありました。当時は第二次世界大戦の最中で、軍国少年を抱いた夢は敗戦となり、期待は失望と変わる空虚な日々が続いたといえます。この時に親戚の高桑先生「秋工ラグビー部長」が戦地より復員し、自宅を訪ねた時に自分の鬱積した心境を打ち明けます。高桑先生からグラウンドに来るよう言われて・・憧れの叔父の姿を浮かべながら、古いユニホームを持って秋田工業のグラウンドに立っていたという。秋田工業高の選手からの親切な指導で自信ができて、自立の道を促されます。逸る想いはラグビー体験者の小竹先生に伝わり、ラグビー部の誕生に繋がりました。小竹先生はラグビー部の創部の目的を明確にするために、創部の精神を必要と考え「部歌」が創られました。

吉田さんは創設当時を振り返りかえり、JR 国鉄工場はじめラグビー関係者の恩は

忘れてはならない「人を捨てるのは簡単だが人を

育てることに意義がある」と語っています。創部の目的はラグビーを通じて真面目な人間育成であり教育の目的は浸透されていました。

二期生の近藤さんが小竹先生の在籍した 2 年間は、毎日の厳しい練習に明け暮れ、最後の締めには「灼熱の炎天下、北風の、世の中は」の順番で毎日飽きもせずに部歌を高唱したと云う。小竹先生は先輩格の秋田工業や、秋田中学「秋田高校」がそれぞれ慶応、明治から借用した部歌であり、新生市立中学（秋田市立・秋田中央）はそれぞれに対抗して、早稲田で行こうと云う気持ちで今の部歌を選んだと推測して居ります（創部 40 年記念誌より抜粋）と記述されている。

一番大切な部歌は三番であると強調され、ラグビーを通じての人づくりは一期生吉田さんと重なる共感者であり、創設者の根底にある考え方でした。

ラグビー部創設者小竹先生の「経歴」

小竹先生が歩んだ西の同志社中は、東の慶応義塾に続く日本ラグビーの草分けであり先駆的な役割を果たした伝統校です。新島襄が創立した同志社は「一人一人は大切なり」「教育家たれ」が精神の下、クリスチャン教育で大学では英文科を卒業し教育家の道を歩みました。

大正 7 年から始まった高校ラグビー全国大会に於いて、同志社中学は第 1 回目から優勝回数 9 回の名門校のルーツ高であり、CTB として活躍され全国大会 6 回目頃の優勝経験者でした。

同志社大学・英文科卒業後は教員の道を目指し、様々な教育畑を転任されますが、その最中に戦争に突入し召集を受けます。復員後は生まれ故郷の京都を避けて、食料事情が良かった秋田を居場所に決めます。特別な身寄り無く秋田に来てからは数回の転勤があり、昭和 21 年秋田市立高校の前身である市立中学に任用されたのが 40 歳の時でした。住まいは旧校舎の一部を間借りして息子一人に娘二人の 5 人家族で、敬虔なクリスチャンでしたが指導は厳しかったと云います。息子は秋田高校を経て秋田大学のラグビー部に在籍していました。戦争で負傷した脇腹の痛みを堪え、セービングの手本を示し選手と共に走ったといえます。

秋田県ラグビー協会第二代会理理事長就任

秋田県のラグビーは戦後になりラグビー界の発展と普及のために秋田県ラグビー協会を発足させ、初代理事長には秋田工業高ラグビー部長の高桑先生が就任します。大正14年に創部の秋田工業高は、終戦まで全国大会2回の実績がありました。全国の高校ラグビー界は同志社から京城師範へ、そして秋田工業と覇者が入れ替わる時代でしたが、同志社中の存在は高校ラグビー界では別格の伝統校でした。

創部した翌春の昭和21年5月市立中学は、中学校ラグビー秋田県大会で秋田工業を3対0で破る殊勲の金星を上げます。地元新聞の秋田魁は大きく報道し県民を驚かせ、この快挙に小竹先生は歓喜の喜びだったといいます。秋田工業のOB会はこの敗戦でしばらく紛糾します。低いタックルは設立した時から相手チームからは嫌がられ、中央高校の堅守は以後負けない戦略の柱となりました。

教育家でありラグビーの指導者としても優れた戦略家の小竹先生に、高桑理事長は特段の敬意を払われて2代会理理事長を譲り就任します。また同時に秋田県ラグビー協会のトップレフリーも勤めました。秋田市立高校を二年間在職した転任後は、秋田県教育委員会等を経て教育畑を歩まれ昭和37年3月に秋田県立増田高校校長の退職で終えます。

岸部長の熱血教育

岸先生は山形出身者で英文科の経歴があり大学卒業後は陸軍士官学校を経て教育畑を転任します。昭和31年に秋田市立高校「現中央高校」に着任しますが、当時の学校の教育方針は赤点取れば留任させる厳しい時代でした。着任早々学校長から門外漢のラグビー部の顧問を要請され、文武両道の学校方針の下で監督兼部長となります。

副部長には女房役の岡先生がおり、コーチは学校長が要請したJR土崎工場のFWの駒野谷さんでした。岸先生と共に7年間を手弁当の無報酬で足繁くグラウンドに駆けつけ、献身的に岸先生を支える3人の指導体制が生まれます。宿敵秋田工業は既に全国大会優勝7回の全盛時代、在任中4回秋工優勝であり、与えられた厳しい環境の下、玉石混淆の選手を育成しラグビー部黎明期時代に礎となる伝統を創った熱血教師でした。雨天は教室に集合し負傷を押しても戦った選手の勇姿を披露され、語りだすと口から泡を飛ばし敢闘精神を熱く語り、闘争心を鼓舞した

座学が偲ばれます。

部歌が解らなくなった

岸先生がラグビー部顧問の就任から、初めて出場する2回目の全国大会出場の昭和34年には、小竹先生へ手紙を出し部歌の不明確を問い正します。

全国大会が冬であり部歌1番「灼熱の炎天下」に違和感がありました。本場英国のラグビーはウインタースポーツだから「北風」であることを告げられます。この時に小竹先生の合意を得て1番「北風」と2番「灼熱」が入れ替わりました。同時に「フェアプレー」が「ヒッピー・プレー」に修正されます。同時期の高田氏「S35卒」は「自分たちの時」に部歌が変わった事を記憶されておりました。この時代まで一番の「灼熱の炎天下」しか斉唱されていない事が解り、2番・3番は省略されて歌われていなかったこととなります。(部歌変遷記録) 参照

第3回目の全国大会出場は昭和36年がラグビー部最高位のベスト8まで勝ち進み熊本工業に惜敗します。秋田国体の年でした。

私が入部したのは第4回目秋田市立高がS37初の単独出場で、秋田工業は連続出場30回が途絶えた時でした。花園出発を真近に控えて岸先生から幻となっていた部歌3番の存在を知らされます。

事実上の決勝と云われた優勝候補天理との対戦が決まり、部歌の3番復活は大いに志気が高まりました。この大会から高校ラグビーのメッカは西宮球技場から近鉄花園に変わります。花園ラグビー場の鏡開きとなった第一試合で秋田市立高は、日本一を目標に掲げ超高校級のBKを揃える強豪天理に挑みます。秋田県予選では早いFW集散の球出しから外側展開で勝利を何遂げますが、天理には攻撃重視から守りを重視した最強の守備固めをします。勝負処はスクラムサイドと第一CTBに絞り、試合巧者天理を脅かしトライを奪いますが13対5で惜敗し、その後天理は下馬評通り全国制覇をします。天理はこの大会を通じて許したトライは秋田市立高だけでした。

岸部長はこれが最後のラグビー人生となり在籍8年間で全国大会3回、国体2回の出場戦績で転任されます。角館高校の学校長を退任されまでの20年間は、創部の精神である本物の部歌の復活を願い、忸怩たる思いを抱いていました。

混迷を深めていく部歌

角館高校校長を退任されてから未解決となっている部歌を、創部 40 周年を迎え「フェアプレー中央」ではない「ヒップ・フレイ中央」である事実を口頭で知らされます。しかし生聴きのため「ヒップ・フレイ」は3 番だけ修正されます。その後創部 45 周年の部歌名簿では「ヒップ・フレイ」と指摘された通り修正します。しかし新たな問題として抜山蓋世の「意力」を「威力」に変えてしまいます。「部歌の変遷記録」参照

節目の創部 50 周年を迎え岸先生から再び修正確認のお手紙が届きます。学校火災で小竹先生から頂いた資料を焼失し、創部当時の記録が不明確なので、この機会に創部の歴史の追跡をして、小竹先生の創部の精神に応えるべき旨の手紙でした。

しかし見間違いがあり創部 50 年記念誌には「フィップレー」と誤って記載し、抜山の「威力」は変えてはいませんでした。以後創部 60 周年、創部 70 周年でも残念ながら記念誌は変わっていません。70 周年記念に出席された二期生の元ラグビー部長だった木内先生は、草創期の部歌は「ヒップ・フレイ」である事を記憶していました。

なぜ部歌が曖昧となったか？

本物の部歌が継承した時期は毎日の練習後斉唱する創設期の二年間でした。小竹先生が転任後は学校の指導者が不在の中で競技指導が主体となり、学校関係者やOB 会も部歌の大切さに気づかない事が、混迷を深める原因となりました。

小竹先生の転任後は S24 から「ヒップ・フレイ」が「フェアプレー」となり、S28 から一番「灼熱の炎天下」だけの斉唱であり、岸先生が昭和 35 年に着任されるまで 2 番・3 番の空白期間が続きました。岸先生は部歌は指導者の絶対条件である事を、小竹先生を通じて深く認識されて「ヒップ・フレイ」に復元し、2 番「北風」と 1 番「灼熱」を入れ替え、幻の 3 番も復帰しました。しかし岸先生転任後は学校指導者が居ながら、部歌への関心が薄かったこととなります。その結果、岸先生は懸念する創部の精神を OB 会に委ね、10 年毎の創部記念時に見直します。しかし部歌の本質が深まらない中で、容易に修正し歴史認識への未熟さが招く結果となりました。

「部歌の変遷記録」参照

どうすれば部歌の精神を継承できるのか？

草創期の検証後は歴代会長への説明会を聴く機会を設けましたが、今頃になって歴史を知ってどうなるのか？ 創始者は誰が解るのか？との発言もあり、小竹先生が何のために創ったラグビー部なのか？大切な問題が易きに流れて議論を避ける事が危惧されます。創部の目的を失えば創部の精神は盲目となり、変えてはならない事まで変えてしまいます。

何のためのラグビー部が創られたのか？

学校にとってラグビー部誕生は単なる勝利を競うクラブ活動ではありませんでした。ラグビー精神の考え方「One for All・・・」は、自らの身体を惜しまずに組織への約束が、人を育て人格形成へと繋がる社会性の高いスポーツこそ、学校長が目指す文武両道と相通じるものでした。

戦後の動乱期であり社会治安が悪い環境に学生が巻き込まれる事無く、ラグビー活動に向けられた背景は、高校ラグビーを体験され、同志社大学での「教育家たれ」教育に造詣が深い小竹先生の存在であり、本場英国のパブリックスクールの精神となる、人づくりを目的とした高校スポーツへの共感でした。

その結果として学校長は期せずしての創部に、吉田主将への労いの言葉となったことが推測できます。学校教育は文武両道の教育が目的でありラグビー競技はそのための手段でした。

創部 50 周年に寄せた岸先生の手紙には、文武両道とは「君は東大、僕は花園」のという学校単位の文武両道ではなく、一人ひとりの文武を追求することが本来の在り方である、と記述されていましたが岸先生の着任時には創部時の考え方が学校長に踏襲されていたと云えます。

時代の変化で指導方針は変えても、変えることができないのは創部の精神です。賛成や反対、正誤の比較論や好きや嫌いの感情論でもなく、創設者小竹先生の教育哲学です。高校ラグビーの本質を追求し、考え抜かれた創部魂は、他人に委ねた借り物とは違い、尊重すべき次世代に繋ぐ精神です。

おわりに

岸先生から使命をいただいた歴史の追跡を経て、大先輩の吉田さん・近藤さん・小坂さんからは小竹先生直伝の「大丈夫の道」を貫く、生き様を学ばせていただきました。

第一期生の吉田さんの強い想いが、行動を変えラグビー部が誕生したことが偶然ではない必然性を感じました。草創期は先駆者として奔走しリーダーシップを発揮され、御苦勞された気配りに深く感謝いたします。

第二期生の近藤さんは帰郷後のS36年から母校に通い通称「ドン」さんの存在感で岸先生の下、黎明期から隆盛期の中心的な役割を果たします。小竹先生直伝の堅守を柱に明確な戦略を描き、若き指導者の渡部監督を支えて、高い目標で日本一に挑戦しました。S42年の大分国体優勝まで学校・OB一丸体制の要となって中央高校ラグビーを牽引する力となります。与えられた条件は厳しくても創意と工夫の発想で人を活かします。想いの丈やったラグビー人生には悔いはなかったと潔く語っていました。OB会の中では唯一小竹先生と最も関わりが長く、体に染み込んだ部歌の記憶が鮮明であり、数多くの示唆をいただきました。復元した本物の部歌は、安定したリズムであり創部の原点に相応しく、OB幹事長の金公一君や幹事の金城君の前で小坂さんと共に誇らしく高唱しました。今後は楽譜をつくり活用されたいと思います。

高校ラグビーのルーツ校である体験を経て名門校同志社大学から教育家を目指した小竹先生が、在籍二年間だけに留まらず以後も秋田中央「市立中学」に長く在籍していたなら、秋田県の高校ラグビーの歴史は変わっていたと思われれます。復元された本物の部歌は創部の精神としてかけがいのない財産となりました。部歌とは何かと問えば単なる唱歌ではない。あるべき姿を言葉にし次世代に繋ぐ創部魂が創部の精神である事に納得いきました。

岸先生から創部50周年に寄せた手紙には強い言葉で「これだ」と部歌三番を強調され、1番2番あつての3番であり、どれが欠けても部歌には成り得ない、・・・創部の歴史を追跡せよと重い使命をいただいてから、紆余曲折を経て歴史考証し多くの事を学ばせて頂きました。幸運にも小竹先生と苦楽を共にした草創期の方々がご健在であり、当時の記憶

が鮮明でした。修正された部歌には間違いがないOB先輩から快諾をいただき本物の部歌としてDVDに収録し今後活かすことができるようになりました。

この仕事の目的を実現するためにS39卒業の近野氏に格別のご協力いただき感謝申し上げます。

初代監督小竹先生が掲げた高い理想の創部の精神が、岸先生の負託に応える歴史の追跡の検証と成り得たのでしょうか。

不慣れな物書きで起承転結が整わず失礼をお許しいただき、消えた真の伝統が蘇り復活されることを願うばかりです。

平成30年5月3日

部歌修正の補足説明

拔山蓋世 史記 項羽本記の意味

今まで最強の連戦連勝の項羽の勢いが衰え、劉邦に逆転される敗北を悟り、愛人虞姫と別れる歌であり四面楚歌となった心境の詩。項羽の天下取りの敗戦は1を知り2を知らず、戦い方は知っても、人づくりをしなければ組織は崩壊する戒めの言葉である。

三国志時代の殺伐した戦いに生死を賭ける国盗りだが、高校ラグビーの視点は教育が目的のスポーツです。「拔山の威力」を「拔山の意力」に置き変えて、高校スポーツの視点に相応しく修正されています。早稲田と一部似ていますが早稲田は早稲田の考え方であり、「似て非なり」です。他との比較の論

理ではなく小竹先生の信念であり教育哲学です。

「フェアプレー中央」ではない「ヒップ・フレイ中央」が正しい

創部当時は[hip, hip, hirrh!] [ヒップ、ヒップ、フレイ]で歌った。しかし選手の言葉が訛り、真ん中のhが消えるために「ヒップ・フレイ」に簡略化した小竹先生の造語である。

村上晃一氏の解説は一般的解釈として「ヒッピ・ヒッピ・フレイ」は正しいが、ラグビー部員へ小竹先生が歌い易くした。

「フレイ」は応援歌 喝采・万歳等、「プレー」は競技で意味が違う

「ヒップ・フレイ」岸先生の訂正依頼ハガキ抜粋

hip, hip, hurrah! ヒッピヒッピフレイ (万歳) がなまって真ん中のh (黄色) が消えてヒップフレイとなったのですから (hipは喝采などの発声) です

「ヒップ・フレイ」ラグビージャーナリストの村上晃一さんの説明

ラグビーで相手にエールを贈るときに慣例となっている「ヒッピ、ヒッピ、フレイ」で間違いないと思います。ラグビーでは、試合直後やアフターファンクションで部歌を歌った後などに、相手チームの検討を称え、幸運を祈るといような意味で使います。この意味なのだが、辞書を調べると「万歳三唱」っていう意味は、正しくは「スリー・チアーズ・フォー・(チーム名)」とリーダーが言ったあと、続けて「ヒップ、ヒップ」と言い、メンバー全員が「フレイ、フレイ」と応じて、これを3回繰り返すのが正式のやり方のよう。僕も大学時代から、これ良くやったけど、リーダーが「ヒップ・ヒップ」をもものすごく速く云うので、ずっと「ヒット、プレー」だと思っていた。ラグマガの編集部にハイいてから正しいことが分かったのだが、「ヒップ、ヒップ」は、早く言うと「ヒッピ」に聞こえる。

部歌三番 世の中は・・・に変更

創部 S21 から S27 まで「世の中」で歌われたが、S37 から岸先生の聞き違いで

「世の波」に変わる。二期生近藤さんと確認し「世の中」に戻す

部歌三番 墮ちるも・・・に変更

三番が復帰した最初の創部 40 周年誌に「墮ちるとも」と記載されるが誤り。

第二期生の近藤さんと確認し「墮ちるも」に変更

部歌のリズム

安定したリズムで歌い易く、この機会に部歌の楽譜をつくり後世に残し啓蒙すべきと考えます。

創部の精神「部歌」の概略

一番「灼熱の炎天下」・・・炎天下でも不屈の精神で心身を鍛錬し克己心を育む

二番「北風のただ中に」・・・北風は本場英国では冬のウィンタースポーツである登山蓋世は戦いに挑む姿勢で本質は教育であり、ラグビー精神は命を賭ける勝利への自己犠牲と本質は同じである

三番「世の中は」・・・社会で道を切り拓く男児の高い志。ラグビー精神を通じた自らの体験された創部の精神は、他人に委ねた借り物とは違う教育理念である。

部歌順番の意味

創部 40 周年で第二期生の近藤さんが寄稿文で「灼熱の炎天下、北風の、世の中は」の順序で毎日高唱した・・・と記載。部歌の順番は選手が育つ過程の意味

岸先生は1番2番あつての3番でありどれが欠けても、部歌には有り得ない。

「創部 50 周年のお手紙から」

部歌のまとめ

岸先生が求めた歴史の追跡で部歌は明確になった。

小竹先生から聞いた御教示や、第二期生の近藤さんは二年間小竹先生と共に生き、毎日斉唱した記憶を尊重し判断基準とした。

第二期卒で元ラグビー部長の木内先生の記憶。高田先輩の記憶などが有力な情報となった。